

議事要旨

名 称	令和5年度 第1回 目黒区在宅療養推進協議会
日 時	令和5年10月17日（火）午後6時30分～午後8時
場 所	目黒区総合庁舎 4階 政策会議室
出席者	<p>（委 員）七里眞義委員、渡邊英章委員、池田泰委員、寺田友英委員、樋口直美委員、廣川直美委員、岡島潤子委員、廣川君代委員</p> <p>（区職員）橋本健康福祉部長、石原健康推進部長、香川健康推進課長、保坂福祉総合課長、田邊健康福祉計画課長、齋藤保健予防課長・新型コロナ予防接種課長、齋藤碑文谷保健センター長、相藤介護保険課長、高橋高齢福祉課長、田中障害施策推進課長、岩谷障害者支援課長、中野生活福祉課長</p>
次 第	<ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 委員紹介 3 会長及び副会長の選任 4 議事 <ol style="list-style-type: none"> （1）目黒区在宅療養推進協議会の公開等の取り扱いについて（案） （2）在宅療養推進事業の取組及び実績 （3）在宅療養推進支援病床確保事業の実績 （4）在宅療養相談の実績 （5）在宅医療・介護連携に関する研修の実績 <ol style="list-style-type: none"> ① 在宅療養相談業務向上研修 ② 在宅医療と介護の連携に関する研修（全区版） ③ 在宅医療と介護の連携に関する研修（地区版） （6）難病対策について （7）その他 5 閉会
配布資料	<p>次第</p> <p>資料1 目黒区在宅療養推進協議会設置要綱</p> <p>資料2 目黒区在宅療養推進協議会の公開等の取り扱いについて（案）</p> <p>資料3－1 令和5年度 在宅療養推進事業の取組み</p> <p>資料3－2 令和4年度 在宅療養推進事業の実績</p> <p>資料4 令和4年度 在宅療養支援病床確保事業の実績</p> <p>資料5 令和4年度 在宅療養相談の実績</p> <p>資料6－1 令和4年度 在宅療養相談業務向上研修実施報告書</p> <p>資料6－2 令和4年度 在宅医療と介護の連携に関する研修会実施報告</p> <p>資料6－2 令和4年度 在宅医療と介護の連携に関する研修会受講者 （別添） アンケート結果</p> <p>資料6－3 令和4年度 在宅医療と介護の連携に関する研修実施報告 （地区版）</p> <p>資料7 難病対策について</p> <p>参考資料 目黒区在宅療養推進協議会 委員名簿</p>
議事及び質疑応答	
<p>会長及び副会長の選任</p> <p>互選の結果、会長に東京共済病院院長 七里眞義委員、副会長に目黒区医師会会長 渡邊英章</p>	

委員が選出された。

議事

(1) 目黒区在宅療養推進協議会の公開等の取り扱いについて (案)

事務局より、資料2に基づき説明。

異議なしのため、案を取り、決定とする。

(2) 在宅療養推進事業の取組及び実績～(5) 在宅医療・介護連携に関する研修の実績
福祉総合課長より、資料3～6に基づき説明。

樋口委員より資料6-2について説明。

主な質疑応答、意見等は下記のとおり。

- ・ 独居で、特に身寄りのない方や、親族が遠方にいる方たちも都内には多いと思うので、そのような方たちへの取組を考えていく機会としては必要である。
- ・ 相談実績の中で、家族からの相談は結構あるのか、また本人と家族からの相談の内容の違いについて伺いたい。

→週末は特に、遠方の両親を引き取りたいという相談や、悪性腫瘍の療養開始に伴い引き取るので、近隣の医療情報についての問い合わせもある。また、悪性腫瘍の場合は本人が相談に来ることも多い。

相談内容としては、介護保険申請のタイミングや、入院後の支援、認知症の相談も多い。ご家族からの相談も多いが、ご本人からの物忘れに関する相談もあり、一人暮らしの方の不安の高さが伺える。

- ・ 介護保険に該当しない、身寄りもない、そういった「おひとり様」の相談をどうやって把握、受け入れていくかが課題だと認識している。日頃のことは大体できるが、何かちょっとした書類の作成などを相談する人が誰もいない、これからそういった「おひとり様」を支援していくことができるかどうかで、現状が変わっていくと思う。
- ・ 家族がかかりつけ医から、元気なうちに包括に相談に行くようアドバイス受け、初めて地域包括支援センターに出向いた。その後、包括支援センターから自宅に聞き取りに来てくれて、データとして登録してくれた。このように管理してデータに入れておくことで、何かあったときにすぐ対応してもらえる。今回、かかりつけ医の意識が高く、そこにアプローチできていたという実感がある。
- ・ 包括支援センターが何をやっている場所か、まだまだ知られていない。包括も、こちらから出向くことで、元気なうちから包括を知ってもらい、いざという時に繋がっていただきたいと思う。
- ・ 普段からの顔の見える関係性の構築が非常に大事である。
- ・ 入院前にお持ちの薬を整理して、それを入院時にもっていくような形にできないか、そういったフォーマットをつくるようなプロジェクトが進んでいる。かかりつけ薬局は患者さんのことをよく知っており、薬のことも把握している。病院の方も入院時に持参した薬の整理にかなりの時間を要しているので、こういった業務に少し役に立てるのではないか。まだ形が出来てきたところなので、報告、共有して、役立てていければと思う。
- ・ 残薬の問題は、以前から大きな社会問題になっていて、通院時には残薬を持参するよう伝えている。残薬を持たせることで、先生たちが処方を考えるきっかけにもなるし、未病や医療費の抑制、より効果的な医療介護につながっていくと思う。先生たちの言葉をきっかけとして動いてくれることもあるので、ぜひ先生たちには積極的にお声がけいただきたいと思う。

また、独居の方の服薬管理は難しく、一包化する、カレンダーに入れる、ということだけ

でも整理されて、状態が落ち着いてくる方もたくさんいらっしゃるので、この部分についてはみんなで力を合わせられるととても良いと思う。

- 一包化の問題として、その中のある種の薬が不要になった時等の対応について、そういう要望は結構ある。その場合は薬を預かって、出来た時点で連絡をしている。点数化していないので、現段階では薬の管理と考えてやっている。
- ケアマネージャーとの信頼関係が出来てきた方達は、残薬をきちんと見てくれるようになってきている。やはり薬局に行かない方たちはそういないので、薬局はすごく大事だと思う。最近本当に相談にのってくださるし、お薬手帳の持参も聞いてくださるので、いろいろなことが進み始めたと思う。
- 訪問すると、お薬手帳を見せてくれるのが常態化してきているのが、以前とは違うと感じている。
- 薬の管理という面では、そこにどれだけ信頼関係を構築されているかというところだと思う。一所懸命アプローチしても、とにかく拒否という方もいる。薬とか治療に関しても、その人に対して寄り添う、時間をかけてお互い話して有意義な関係を築くことで、それを医師にもフィードバックして、さらに良い形になってくるのではないかと個人的に思う。
- 入院患者さんのデータで疑問を覚える方を調べてみたところ、今までもらった薬をほとんど飲んでいなかったという例もある。
- 不要の薬の選別というのも非常に重要である。ご家庭に置いていると、間違っただけ飲んでしまう可能性もあり、捨てる勇気も必要だと考えている。

(3) 難病対策について

保健予防課長より、資料7に基づき説明。

主な質疑応答、意見等は下記のとおり。

- 実施内容を具体的に伺いたい。
→音楽療法士によるレクリエーション、理学療法士によるストレッチ、保健師も交えて悩みを話していただくような場を考えている。利用された方々の意見をふまえながら、よりよいものに進めていく。
- 難病カフェの人数制限はあるのか。
→今のところ先着20名として申込受付をしている、現時点で余裕があるため、ご興味のある方がいれば、勧めていただければと思う。
- 周知方法について伺う。
→ホームページで周知を図っている。目黒難病カフェと検索すると、案内ページに飛ぶ。
- 機能訓練室の場所は3階保健予防課の奥の部屋か。
→そのとおりである。
- 車いすで行くことも可能か。
→碑文谷保健センターも含めて、車いすも対応可能である。
- 東京都の事業で、小児の在宅レスパイト、難病の在宅レスパイトというのがあり、ご存知ない方も多い。今までは郵送での申し込みだったが、インターネットで申請可能になったので、便利になっている。
訪問看護ステーションも難病を受け入れづらく、経験をしたことがないというところがありが難しいところもあるが、研修も含めて協力・支援をしていただけると有難い。
- ケアマネージャーとヘルパーの実数が、非常に少なくなっていて、マンパワーが足りない、そのあたりも含めた支援をお願いできると有難い。
- マンパワー、人材が本当に不足していて、特に訪問介護は、事業者が大変だと思う。これから、周りに助けてもらいながら、ケアマネージャーやホームヘルパーも目黒区で育

て、やはり目黒区は住みよいところだというふうになれば嬉しい。

- 病院もスタッフ不足のために全体的に裾野を広げていくような底上げが必要だと思っている。忙しい専門職だけを助ければ問題を解決できるわけではないという現実が実際の医療や介護の世界では明らかになりつつある。行政の力や知恵をお借りしなければならず、いいアイデアがあればお教えいただきたい。
- コロナの方は8・9月に感染がピークになったあと、10月になると診断される患者数は減っており、インフルエンザが流行している。最新の医療データではコロナと診断された患者数は5月8日の5類移行時あたりの水準まで低下している。現在蔓延している変異株については無症状感染が感染者全体の7割という海外のデータがあり、とくに若い方やワクチン接種済みの方は感染してもほとんどの場合に症状があらわれないうま、周囲に感染を広げてしまっている。そのため、発症した方は誰からどのように感染したのか分からないまま、家庭内では免疫力の低い高齢者が最後に発症して入院してしまうといった状況が続いた。今後、再び蔓延し始めると同様のことが起こるかもしれないので、感染の動向には注意しながら見ていただきたい。

その他連絡事項

- 第2回目黒区在宅療養推進協議会開催：令和6年2月～3月（予定）
以 上